ぱちんこ
言葉物語 ⑱

「トイレ目」

流れを変える運試しで

今回の言葉物語は「トイレ目」です。パチンコやスロットを打つ方であれば、誰しも「流れ」を変えることを兼ねてトイレに行くケースは多いと思います。特にスロットでは席を立ちつつ「これで運があればボーナスが入っているといいな」と思いながらこの出目を出すことがあります。今回はこの言葉を掘り下げてみたいと思います。

リスクあっても期待感

語源は攻略雑誌から始まったといわれるこの言葉ですが、要約すると「リールを全て停止する前に小役又はハズレorボーナスを知らせる出目が停止している状態を指し、ユーザーが残りのリールを停止させないままで席を立つ一連の行動とリールの出目」といえます。スロットに液晶が搭載される前では、意識せずとも多くのスロットユーザーが行っていたものですが、5号機のリール制御ではカラ回し状態のままリールを自然停止させた際には小役が成立しないようになり（条件により一部例外あり）、現在ではマイナーになりました。このトイレ目と呼ばれる多くは「小役orボーナス」が成立している状態のものを指し、ボーナス当選を知らせるリーチ目の一歩手前の状態であるといえ、特に大量リーチ目搭載機種や、コントロール制御（主にリールの滑りなどでボーナスやチャンスを察知する）機種では多くの秀逸なトイレ目がありました。

トイレ目の代表格であるクランキーシリーズ。写真はベル・スイカorボーナスが成立状態にある

通常、このトイレ目を使う場合はしっかりと絵柄を狙ってリールを止めるよりも小役の取りこぼしが発生しやすく、打ち手にとってはリスクのある打ち方でした。しかし現在でもこの打ち方をしているユーザーは確かに存在していますし過去の機種レビューでも多くのトイレ目を嬉しそうに語っています。その理由としては「運試し」と「流れを変える契機とその価値対価」が挙げられるでしょう。

運試しは単純なことですが、休憩を兼ねてこのトイレ目を出したまま席を立ち流れを変えるという使い方を「たとえ損する可能性があったとしても」したいということです。逆に言えば、それだけの価値がこのトイレ目というものにあったということです。あまり期待していないトイレ目で席を立ち戻ってきたら小役成立を否定する出目が停止＝ボーナス成立！という嬉しさは現代の機種でほぼ味わえないものです。それ故に当時では小役取りこぼしのリスクを冒してまでも行う行動でした。

余裕のない時代で淘汰

現在でこの言葉が聞かれなくなってきた理由は2つ。「期待値至上主義」と「演出至上主義」です。

前者は業界人であればご承知のとおり、遊技人口の減少により狭まる市場から要求される利益を達成しなければなりません。ユーザーも現在では情報を多く仕入れられる状況になり業界の状況は概ね把握しています。そのため1枚でも多くの出玉獲得を目指したい中で、そのようなリスクや時間効率の悪い事はしなくなりました。また後者では現在の機種演出上におけるフローが、線路を進む電車の如く進行するため、簡単な話「液晶を見ればOK」となってきていることに起因します。これらから、このトイレ目は自然と淘汰されていきました。

しかし、現在でもこのような打ち方をする人はいると書きました。そのユーザーとは、勝負云々への過剰な固執をせず「この機種の面白さをもっと探求したい」という思いから打つ人々です。精神的にもゆったりと遊べ、且つ奥深い機種というのは、やはり後世でも名機として語りつがれていくものです。それは多くの探究心を満たす要素を備えている機種という事なのでしょう。現在、5号機の名機と呼ばれる機種がホールに復活するケースも多く出てきました。その多くはやはり探究心を多く満たしてくれる機種ばかりです。演出の手法は違えど、ユーザーの求めているものは意外と同じなのかも知れません。

（大和田敏男）

ジャグラーシリーズでは現在でもトイレ目があり、変則打ちユーザーも多くいる